



同志社人物誌 (45)

波多野培根

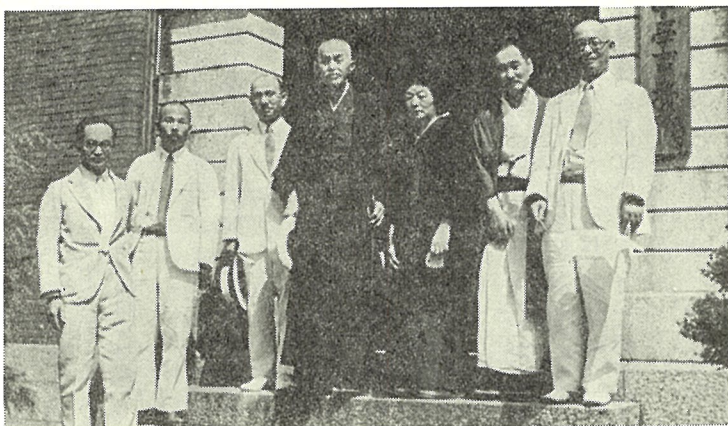
加藤延雄

(現在の校長) となった。同志社において彼は新島という優れた人格に接し、それまで儒教で教育された彼は英学を通じて世界的視野、諸科学の知識を与えられ、さらにキリスト教へ導かれた。彼に一大革新を来らせてくれたのがこの同志社である。また新島先生の永眠前にその遺言により同志社のための尽力を依頼された一人である。彼は大いに奮起して、同志社を日本一の良い学校にしたいと全力を尽した。授業に事務に、夜は読書、研究に、日曜は同志社教会の役員として、また日曜学校教師として奉仕に研鑽に休むに暇なき様であった。大正五年同志社普通学校を同志社中学と改称した。それは当時韓国では小学校のことを普通学校と言っていたからである。大正六年九月中学長事務取扱となったが大正七年一月同志社を退職した。

その後再び伝道界に戻り、活動を始めたばかりの大正九年福岡の西南学院から招かれてその中学部の教師となった。翌十年高等学部が開設されその講師をも兼ねたが、その部長就任の要請は固辞した。彼は西南学院在任二十三年間、寄宿舎において学生と生活を共にした。従って彼の感化影響は学生のみならず

波多野先生はわたしの同志社普通学校時代の恩師である。先生は慶応四年六月二十日島根県津和野藩士の長男として誕生した。津和野広小路小学校を卒業、後沢潟塾に入ったが塾が閉鎖され、明治十八年九月従兄増野悦興の勤めにより同志社英学校に入学して同二十三年卒業した。彼が同志社に入學した年の十二月には第二次外遊より帰国した新島先生を

迎え、卒業二カ月前には新島先生の死に出会った。また入学の翌年にはラーネッド師より洗礼を受けた。卒業後二年間同志社予備校で教えた後伝道を志して涌谷、仙台、白河を転転し明治三十年仙台尚綱女学校教師となり、函館尋常中学、奈良県畝傍中学校を経て明治三十七年母校同志社に招かれて普通学校で英語、歴史、修身を教え、翌三十八年八月教頭



波多野培根氏夫妻を迎えた中学の旧知写真（昭和12年7月27日）左より奥村竜三、前窪教頭、片桐哲、波多野培根夫妻、加藤延年、野村中学校校長（「新報」S12・9・15号より）

教職員に対しても甚大なものがあつたと伝えられていた。夏の長期の休暇には京都の我が家に帰り家族と共に暮らした。冬休みには必ず正月元旦に伏見桃山の明治天皇陵に参拝に行った。私の父延年も必ずさそつた。昭和十三年定年退職したが、学院の要請で講師は昭和十九年まで続けた。

京都に帰つた先生は昭和二十年十一月七日老衰のため京都鹿谷の自宅で永眠した。

先生の同志社在任中の大部分は上京区塔之段桜木町に住居した。そこには白髪のご母堂がおられた。しっかりしたおばあさまであつた。貞子夫人も立派な方で、ごく近くに住んでいた筆者の宅にも時々立寄り裏庭の花を見て行かれたりした。少しのちには先生の独り児である英子さんも誕生し四五歳の頃にはよくわたしの家に来て、わたしの妹と遊んでおられた。

わたしは明治三十九年四月同志社普通学校に入学するとともに先生の指導を受けることとなつた。礼拝で日曜学校でよく先生のお話しを聞いた。バイブルクラスで「コリント書」の講義でキリスト教倫理の一端を教えられた。三年生の時には英語の副読本としてパレ

ーの万国史抜粋を先生にならつて西洋史が好きなになつた。高学年の西洋史は全部先生の担当であつた。教科書も使用したが、先生の授業の大部分は先生が黒板に書かれる事柄を筆写することであつた。たまに書く手を休めて口頭で説明する。その時には先生は目を細め、あるいは全く閉じて羽織の紐をいじりながら語つた。先生の筆跡は吉田松蔭のそれに似ていると思つた。先生の歴史観は唯物史観でなく、精神史観、キリスト教史観、あるいは Providential Interpretation of History とも言うべきもので、歴史は神によって支配されていることを説いていた。先生は歴史研究のために英書などはすでに広く読んでいたが一層広く原書を渉猟すべく、独仏両国語をも独学で勉強し、後には古典語にまで手を伸ばしつつあつたようである。

管理職としての彼も素晴らしい。一般に校長のやる教育方針の確立、教職員の獲得、その統率、教員会議の運営、礼拝の指導から教務や生徒の指導監督に至るまでやつた。放課後の教室を巡回して落書を消したり、礼拝の出欠を毎朝生徒の名札により調査記帳したり、あるいは生徒の飲酒事件を耳に

すると遠く清瀧まで行ってその情況酒量まで調べて来るというふうであった。教務として時間割に関する事務のために係一名が居た、その谷齋吉君の打明け話によると、谷君と同時に同志社専門学校を卒業した友人は他で自分より高い給料を得ているからと訴えると、波多野先生は先生よりも高い給料を与えてくれたということである。

先生はこわい先生であった。そのこわさは威厳であって、先生の前に出ると衿を正さざるを得ない気持ちになったのである。先生がいつも正座されることは有名である。またその服装も乱れていたことがない。当時同志社の体育総帥であった山県陸軍大佐は、波多野先生は軍隊でならばまさに將軍の器である。波多野先生からなら洗礼を受けてもよいと、その人物に傾倒の気持を述べていた。先生は教頭とはいえ校長格の地位にあったが、別室を持つことなく事務室の一隅に席を設けていた。それでよく外来者は彼を事務員の一人と思ひ、「えらい立派なしっかりした事務員ですわ」と言う人もあった。

しかし先生はこわいだけの人ではなかった。深い真の愛の人であった。わたしの先輩

である本多虎雄君は先生から受けた愛護を感激を以て語っていた。すなわちアルバイト学生であった彼を先生は原田社長に対する彼の無礼を叱責しながらも奨学金を貰ってくれた事や、学費の工面がつかず卒業を諦めていた時、先生が本人にも誰にも言わず学費未納分を払って卒業させてくれた事を。筆者も先生の近くに任んでいたので自然学校の行き帰りに先生と一緒にになり、よく先生から短いながら励ましと指導の言葉を聞いた。わたしは父性の愛を感じた。そんなある時十五年生の時―君は卒業後は軍人にならないかと言われることがある。近年わたしは波多野は軍備反対の平和主義反戦主義ではなかったかと聞かれたことがあるが決してそうではなかったと思う。こここのべたわたしに対する言葉によってもわかるであろう。彼はこれについては新島先生と似た考えをもっていたのではなからうか、波多野先生は軍備や戦争については慎重の上にも慎重にすべきこととしたが絶対反対ではなかったように思われる。先生は当時の兵式体操にも熱心で必要数の銃も購入し学校の発火演習も見に来た。大山元帥の永眠の際には朝の礼拝で元帥を讃える話をした。

しかし、日韓合併には強く反対した。日清日露両役は一面においては日本が韓国の独立を守るためであった、にもかかわらずこれを合併するとは以ての外で、これは日韓兩國のために禍となるであろうというのであった。

先生が同志社を辞任した原因は、原田社長と意見が合わなかったからである。大正六年二月十一日の紀元節に当たり波多野先生は原田社長が式辞を述べたことを望んだが、社長は講演のために熊本に行ってしまった。それまでもそういうことが幾度かあったので、この時先生は思い切って、このような式典は同志社としては大切な行事であり、かつ全同志社の教職員学生に語りかけることのできる稀なチャンスで同志社教育の総元縮である社長としては逸してはならないと抗議した。社長より満足な答が得られず、彼はついに辞任した。彼に同調した多数の教師も辞し、校友も社長に反対する者多く原田氏も一年後には辞任した。同志社はこうして二大功労者を失ったのである。

真のキリスト教教育者、真の同志社マンの姿を彼のうちに見るのである。学ぶべき人である。

〔明治四十四年普通学校、大正五年大学経済科卒業、元中学校長〕